

# 雪国の考古学

## —忘れられた縄文の冬—

福田 友之

### 1 見えてこない縄文の冬

ここ数年来、縄文時代の低地遺跡調査が大規模に行なわれるようになり、木製品等の植物質遺物の出土例が加速度的に増えてきた。本県でも、平成4年度から調査が始まった青森市三内丸山遺跡(前期)以降、八戸市是川中居(晚期)、野辺地町向田(18)(前期)、さらに青森市岩渡小谷(4)(前期)・近野(中期)等の遺跡から縄文時代の木製品等が出土しており、石器時代と言われる縄文時代においても、これらが重要な生活用具であったことが実感として理解されるようになってきた。

ところで、テレビや新聞紙上には、連日のように遺跡調査や考古学上の発見を伝えるニュースが登場し、学会や大学・地方公共団体等から刊行される関連印刷物は、それこそ山のようである。各地で行なわれる遺跡見学会や遺跡関連の講演会・シンポジウム等にも多くの市民が参加している。また、他の分野と提携した学際的な研究も積極的に行なわれており、考古学は今や裾野を広げて突き進んでいる学問の観すらある。近年とくに注目されるようになった縄文時代についても同様で、多種多彩な研究成果が発表され、さまざまな縄文観が示されるようになってきた。しかし、仕事の関係もあってその渦中に身を置きながら、いつもある種の物足りなさを感じられてしまうがない。それは、おそらく筆者が雪深い津軽に住んでいるからであろうが、縄文時代の雪国や冬の生活に関する遺構・遺物等の研究がほとんど見られないのである。

縄文文化は、言うまでもなく東日本地域を中心にして展開した先史文化であるが、その地域の大半は、冬には深い積雪を見る北国である。とくに東北・北陸地方や北海道などに住む人々の大半は、1年のうち3分の1以上を1m以上の深い積雪(図1)(注1)や寒さと宿命的に関わらざるをえない自然環境下にある。これらの地域においては、縄文時代にも冬には多量の降雪が

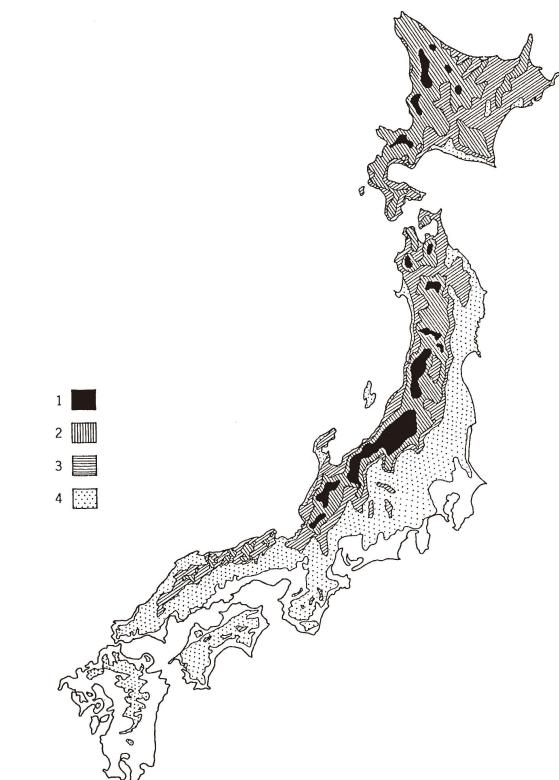


図1-4 日本の最高積雪深の平均の分布  
1: 200cm以上, 2: 100~200cm, 3: 50~100cm, 4: 10~50cm (気象庁編: 日本気候図第2集、地人書館、1972より書き改める)。

図1 最高積雪深の平均の分布

あったことはほぼ間違いないと推測されるが、そうだとすれば、この地域に住んでいた縄文人の生活の基本姿勢は、まず「積雪と厳しい寒さのある冬をどのようにして乗り切るか」ということであった

に違いないのである。しかし、彼らの冬の生活に関する考古学研究者側からの発言はほとんど聞こえてこない。

このような状況のなかで、近年出土例が急増している木製品等の植物質遺物は、研究者側の関心・研究テーマの持ち方次第では、この問題に対する新たな視点を提供するものとして期待される。

## 2 朝日山(2)遺跡出土のソリと民具資料

遺跡から発見される遺構や出土品の用途を考えるために、民具資料等との比較を行なうことが有効であるというのは、考古学の概説書を見れば必ず書かれている基本的な研究方法である。

東北地方や北陸地方等の民具に関するものに、江戸時代後期に著された、三河出身の紀行家菅江真澄の東北地方・北海道の『遊覧記』<sup>(注2)</sup>や越後塩沢の文人鈴木牧之の『北越雪譜』<sup>(注3)</sup>などがあるが、それには今から200年前や160年以上も前の人々の生活が生き生きと描かれており、当時の雪国の生活を具体的に窺い知ることができる。そして、これと大差のない生活が、青森県内の市町村史や資料館・博物館等に収蔵された民具資料を見れば、ついこの間まで続いていたことが実感される。

さて、平成14年(2002)になって、当センターが平成12年に行なった青森市西部の朝日山(2)遺跡の発掘調査において、深さ約2m50cmの井戸跡(第343号土坑)から小型の木ソリが出土していることが判明した。長さ約37cm、幅約20cmの大きさで、台木(滑走部)(図2-1・2)と棒状木製品(遊木・横木・ユギ)(図2-3・4)各2点の部材からなり、平安時代～中世のものと考えられている<sup>(注4)</sup>。遊木が收まる乳の部分が、欠損してはいるものの4ヶ所にあり、さきに述べた江戸時代後期の民具例のなかで、東北・北陸地方で広く用いられていた「四乳」(ヨツジ)を持つヨツヤマソリ<sup>(注5)</sup>に酷似している。これは、津軽地方でも最近まで用いられていた型式の荷ソリである。今回出土したソリは非常に小型であるため、具体的にこれに何を載せて引いたのか、あるいは子供用なのか、漠としている。今後の研究課題であろう。

出土品と(文献に著された)民具資料等との酷似に直面してみて、雪上で物を運ぶという方法が長期にわたってほとんど変わっておらず、しかも雪に対する処し方が、雪国ではほぼ共通し地域差があまりなかったことを認識させられた。そして、考古資料と雪に関連した民具資料との比較が、今後必要になってくることを強く予感させられたのである。

雪に関わる用具類は、江戸時代から中世・古代へ、そしてさらに1,000年、1,500年前へと遡って、かりに縄文時代晚期に雪上運搬具としてのソリがあったとすれば、その形態は朝日山(2)例と類似していた可能性が考えられる。そしてまた、ソリのほかにも、雪に関わる、たとえば雪ベラなどの除雪具類、履き物・防寒具類の多くも、降雪地帯の民具資料に形態が受け継がれているものと想定される。

本県を特徴づける雪に関した木製品が、平安時代以降の例とはいえ、ようやく一例確認されたわけであり、今後の類例增加を期待させる出土品となったことの意味は大きい。

## 3 考古学におけるこれまでの冬の取り扱い

さきに、雪国の生活とくにその冬の生活に対する考古学研究者の側からの発言がほとんど聞こえてこない旨述べたが、雪国や冬の生活への視点を含めた縄文文化研究がまったく行なわれて来なかつたというわけではない。故山内清男氏の「サケ・マス論」<sup>(注6)</sup>、小林達雄氏の「縄文カレンダー」<sup>(注7)</sup>、

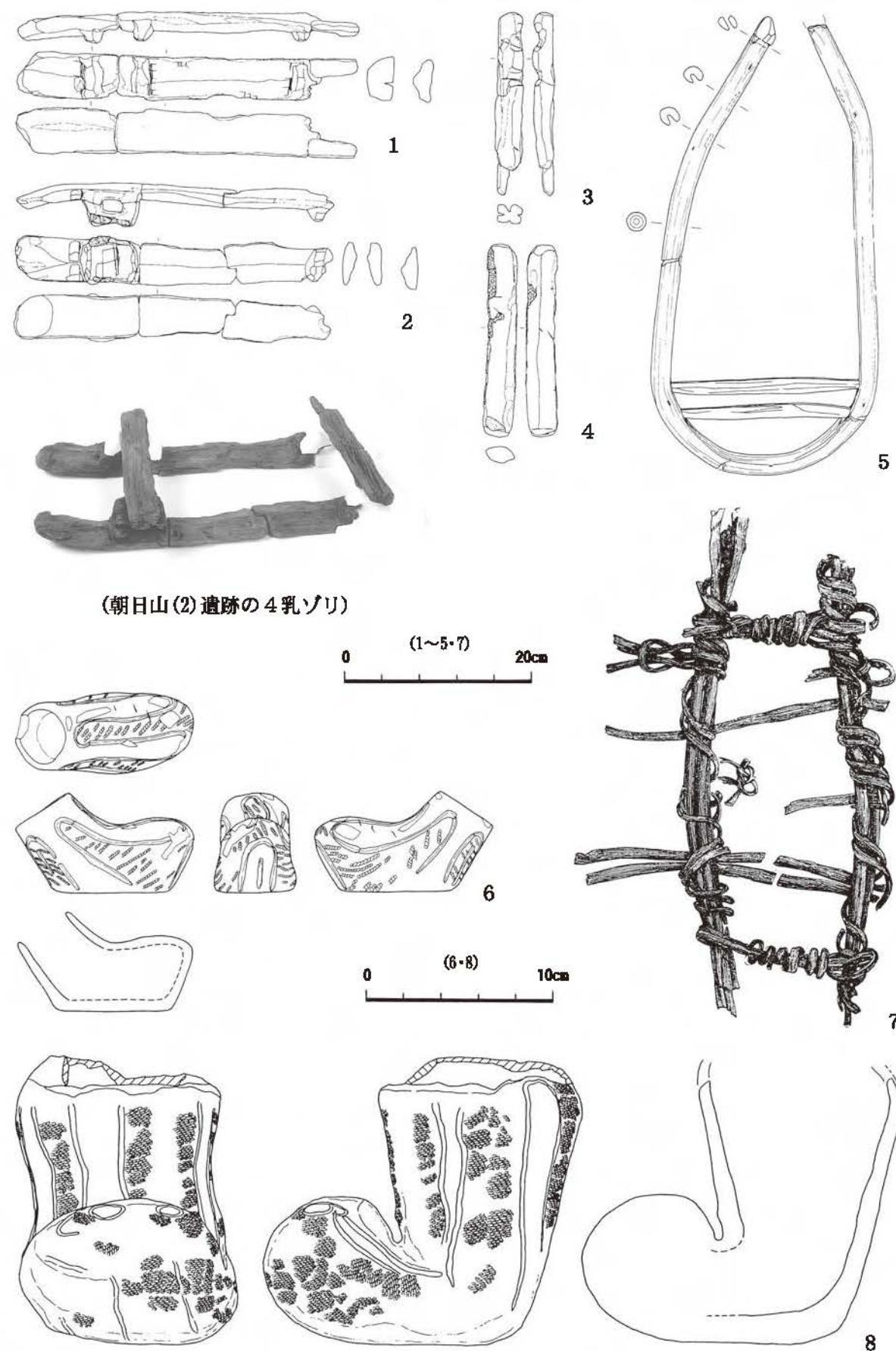


図2 鹽に関連した遺物

岡村道雄氏の「貝塚からみた食料採集の季節性」(注8)、渡辺誠氏の「大型住居跡」(注9)や「植物食」(注10)などの研究、さらに同氏(注11)や尾関清子氏の「アンギン」(注12)の研究、宮本長二郎氏の「住居・建物跡」(注13)の研究等は、縄文時代の雪国の衣・食・住を考えるうえで重要な視点を我々に与えてくれるものであった。

また、博物館などの常設展示においては、たとえば豪雪地帯にある新潟県十日町市博物館などの展示「縄文ムラの冬の一日」(平成3年展示オープン)があったにせよ、それまでの東北地方・北海道などの雪国の博物館では、全国画一的な「雪のない季節の展示」が主流であった。しかし、その後開館した博物館には、『名寄市北国博物館』(平成8年開館)や『新潟県立歴史博物館』(平成12年開館。館長は小林達雄氏)などのように、常設展示に縄文時代の冬の生活を意識して取り入れている博物館も見られるようになってきている。とくに、後者は、豪雪地帯としての新潟県の歴史的特徴を、ジオラマ等によって縄文時代から近年までを具体的かつダイナミックに展示しており、今後の雪国の博物館展示のひとつの方向性を示したものとして評価されるものである。

さきに紹介した研究のなかで、渡辺誠氏の「縄文文化の発達とブナ帯」の論考(注11)は、縄文時代における雪国で使われたとみられる遺物を具体的に取りあげており、筆者の思いと共通する部分が多く、小文のきっかけとさせていただいたものであるが、この論考で、渡辺氏は八戸市是川中居遺跡から出土した縄文時代晚期の蔓性のカンジキ(雪上歩行具)と見られるもの(図2-7)(注14)や長野県(伊那市手良)から発見されていた縄文時代中期の深靴形土製品(図2-8)(注15)などを紹介している。

雪国の冬の生活を示す遺物としては、この後、筆者知っている範囲では、秋田県河辺町松木台Ⅲ遺跡から縄文時代中期後半(大木9式期)の靴形土製品例(図2-6)が出土しており(注16)、さらに同県五城目町中山遺跡からは縄文時代晚期前半の樹皮製品(図3)も出土している。この樹皮製品は直径30cmほどのドーナツ状のもので、枝に着いたままの杉の葉を、幅2.6cmほどの杉皮で巻き束ねたもの(注17)であり、秋田マタギが使用した「ワラダ」に類似すると指摘されている(注18)。ワラダは、奥羽山系に住む秋田・岩手県等のマタギたちが、冬にノウサギやヤマドリ・キジを生け捕るために用いた蘆製の狩猟用具で、ドーナツ状の本体に木の取っ手を串刺しにして取り付けたものを、対象物に向かって空中に投げて用いたものである(注19)。また、時代はより新しくなるが、北海道札幌市K39遺跡では擦文時代の蘆製カンジキ(図2-5)(注20)も出土している。さらに平安時代の遺構として、津軽地方にみられる堅穴住居跡に伴う周溝が、冬の排水を目的としたものであるとする見解も提示される(注21)など、少しづつではあるが類例が増え、問題意識を持った研究者も現れてきている状況である。

雪国の生活に関わる遺物・遺構に関する研究・論考が少ないのは、考古学のよりどころである「遺構」・「遺物」つまり雪国の生活を示す具体的な資料が非常に少ないとすることによるのは間違いない

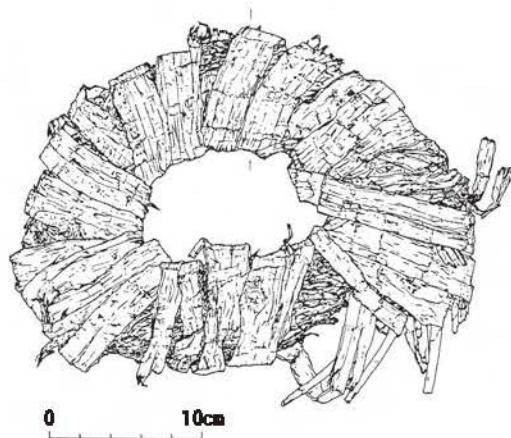


図3 ワラダ状樹皮製品(秋田県中山遺跡)

い。またこれには、雪国の冬という視点に立って出土品等を見てこなかったことも大きな要因としてあげられる。これまででは、出土品の用途を推定する際には、無意識のうちに、冬の季節を除いて春から秋までの雪のない季節を念頭に置いてきたように思われる所以である。

#### 4 「雪国の考古学」の視点から

雪に関する考古資料を探索・研究するためには、民具資料等との比較が重要であることは当然のことである。しかし、一般的にはこれで良いとしても、雪国に住む筆者にしてみれば、これだけでは基本的に不充分である。研究を行なう前には、その前提として雪国の冬の生活、つまり雪や寒さのなかで暮らしてみることが必要条件にならう。冬の生活経験なしに頭のなかの知識だけで、考古



図4 冬の三内丸山遺跡(1997年3月)

資料と民具資料等との関連を説き、論文を書いたとしても、表面的なものでしかなく、雪国に住む研究者を納得させることは難しい。

このように述べると、若い研究者からは、「今の雪国には、ロード・ヒーティングなどの融雪装置や雪下ろし不要の無落雪住宅がある。住宅は機密性が高く暖房施設にも便利なものがある。また、除雪・排雪にはブルドーザーやロータリー車・ダンプトラック等の大型除・排雪機がある。資料館や博物館に展示されているかつての冬に用いた民具資料とは、もはや結びつかない生活があり、雪国の冬の体験をしたとしても余り意味がないのではないか」と言われるかも知れない。確かに、もっともなこととは思われる。しかしそれは、明治であれ江戸であれ、中世・古代・縄文等であれ、いつの時代においても、程度の差こそあれ当てはまることがある。これを理由にするのであれば、考古学自体はもはや成立しえなくなるであろう。要するに言いたいのは、雪の中で生活し、雪や氷の性質を知り、雪の寒さ・冷たさ・厳しさ、そして楽しさを実体験としてもっているかどうかが重要であるということである。その体験があってこそはじめて、雪や冬に関するさまざまなことに推察力を働かせることができるようになり、出土した木製品等を見る目が養われると思われるからである。

冒頭に述べたようにここ数年来、本県でも縄文時代の木製品が多数出土するようになり、この方面的研究が急務になってきている。この研究を行なう際には(木製品以外の各種出土品も対象になることは言うまでもないが)、雪国に住む研究者の視点で遺構・遺物の用途を考え、雪国や雪国の冬の生活を考古学的に明らかにするという、「雪国の考古学」の視点を持つことが必要となる。これによって縄文文化の研究は、基本的な部分において裾野がより広がることが期待できる。そして、この研究を行なうのは多雪地帯にあって、毎年雪に悩まされながら生活してきた北日本に住む研究者ということにならうが、そのなかでも、縄文遺跡が密集し、本州で最も高い緯度に位置する豪雪地域・津軽に住む研究者がよく似合う。

## 『注』

- (1)木下誠一 1996 『理科年表読本 雪の話・氷の話(第5刷)』丸善、P. 7  
ちなみに青森市の2002～2003年ひと冬の最深積雪(平均値)は最大1m14cm、総降雪量は7m94cmであった(青森地方気象台による)。
- (2)菅江真澄著、内田武志・宮本常一編訳 1965～1968 『菅江真澄遊覧記1～5』東洋文庫54・68・82・99・119 平凡社
- (3)鈴木牧之編撰・京山人百樹刪定・岡田武松校訂 1971 『北越雪譜(第18刷)』岩波文庫1261～1262a、宮 栄二監修、井上慶隆・高橋 実校註 1993『校註 北越雪譜 鈴木牧之』野島出版(新潟・三条)
- (4)青森県埋蔵文化財調査センター 2002 『朝日山(2)遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書第325集、P. 182
- (5)関 秀志 1985 「江戸時代の文献に見える櫛」『雪と生活』第4号 雪と生活研究会
- (6)山内清男 1964 「日本先史時代概説 Ⅲ縄紋式文化」『日本原始美術1』講談社
- (7)小林達雄 1977 「縄文土器の世界 2 縄文世界の社会と文化」『日本原始美術大系1=縄文土器』講談社、小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日選書557
- (8)岡村道雄 1984 「里浜貝塚西畠地点の貝塚を残した集団とその季節的な生活」『月刊考古学ジャーナル』No.231 ニュー・サイエンス社
- (9)渡辺 誠 1980 「雪国の縄文家屋」『小田原考古学研究会会報』第9号
- (10)渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』雄山閣考古学選書13
- (11)渡辺 誠 1985 「第4章 縄文文化の発達とブナ帯」『ブナ帯文化』思索社、P. 101
- (12)尾閑清子 1996 『縄文の衣』学生社
- (13)宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
- (14)杉山壽榮男 1942 『日本原始織維工藝史 原始編』雄山閣、図版91
- (15)綿田弘美 1997 「長野県伊那市手良出土の靴形土器」『長野県立歴史館研究紀要』第3号、P. 75
- (16)秋田県埋蔵文化財センター 2001 『松木台Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第326集、P. 214
- (17)五城目町教育委員会 1984 『中山遺跡発掘調査報告書』、P. 39
- (18)小林達雄編 1988 『縄文人の道具』古代史復元3 講談社、P. 112
- (19)太田粗重・高橋喜平 1988 『マタギ狩猟用具』日本出版センター
- (20)札幌市埋蔵文化財センター 2001 『K39遺跡 第6次調査(第4分冊)』札幌市文化財調査報告書65、P. 230
- (21)木村 高 2000 「津軽地方における平安時代の住居跡」『月刊考古学ジャーナル』No.462 ニュー・サイエンス社